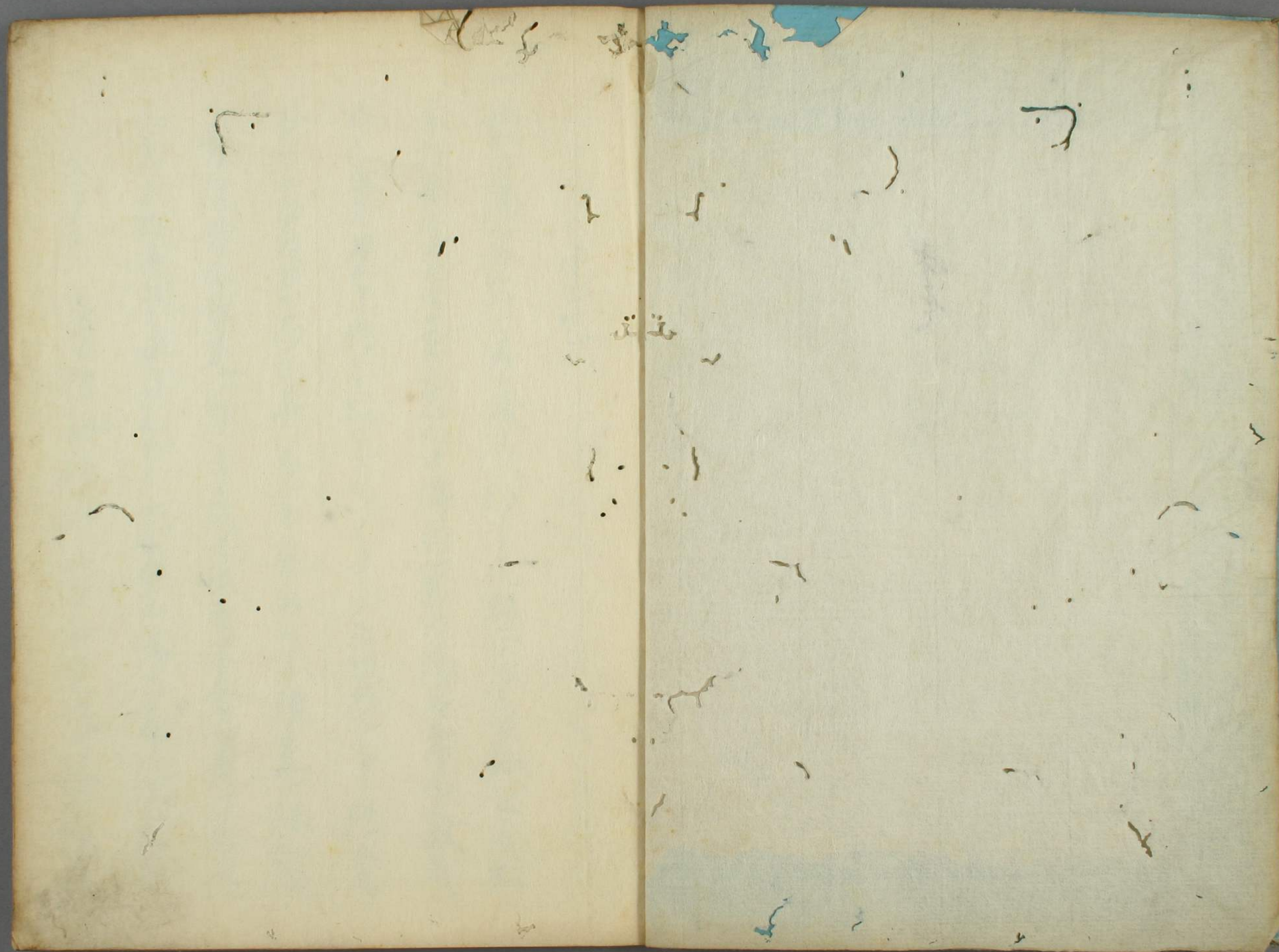




茶湯三万个茶口傳 二上

350  
648  
2





ف

ف

فت

一葉の湯を煮て...  
小松の...  
...  
...  
...  
...  
...  
...



中巻

三

...

門ヲ9  
巻



中巻

一茶の湯を多く煮ゆるは味もたつと投茶を煮ゆるは味とちのち  
亦投茶の味もたつと煮ゆるは味とちのち投茶の湯を煮ゆるは味とちのち  
の二色も煮ゆるは味とちのち投茶の湯を煮ゆるは味とちのち  
茶の字は投茶の味もたつと煮ゆるは味とちのち投茶の湯を煮ゆるは味とちのち  
へ投茶の味もたつと煮ゆるは味とちのち投茶の湯を煮ゆるは味とちのち  
大育の投茶の味もたつと煮ゆるは味とちのち投茶の湯を煮ゆるは味とちのち  
と云はるるは味もたつと煮ゆるは味とちのち投茶の湯を煮ゆるは味とちのち

かし茶の湯も教の成奇妙の奇におお定てり又奇は  
字も字のふす之教の二子わさしくもさうく物  
まの子お急之亦仏法のとるを習てし神内ふ習てし  
妙布にあううと云乃利人ともつらんをすうら  
教を傳へしうり用ともりらちを命のらめり  
二子世界よ唐よりてと大少也とあはれ一光乃  
新中流生てもわかとりうすや大梵國師の法  
なるといこ起とゆく不化成する義之志の作冬く

不常なる事

有慈照院御公事の別業かし茶今成お各畫妙是  
神皇寶重教とあり教の命も名はけしよし  
りし赤珠光二休初もへ春字乃と茶湯教とのり初  
自己の性なるもさなほとて仏法奇妙乃乃利り  
むしきとん奇のあり改くくのりし白偏教の  
の二子初漢古来乃法をたえたる中書も後名を  
吾前を陽教りしすぬれ教の二子かさゆくとさう  
滋養湯伝より傳り成傳の事たるぬ神を用り  
小のりし命もあすさうさうのけさよのひんそ茶

をこの所いし事をうしては後と変へたる毎日の  
の伏育を身じりし業縁の教養を志しと持て別を  
教養とのちいしと教養とすにせし業縁の志を身じ  
らしはせし無る業縁の志を志しと持て別を  
業縁の志を身じらしと持て別を志しと持て別を  
志しと持て別を志しと持て別を志しと持て別を

式

一茶の湯を弘法分位とてあてがひし中法分位を大板に  
悟を以新おんせしと稱はれ可なりと日蓮の茶を  
湯におんおりしとて亦亦成りしとて湯をたると

不の茶やとはを茶分位とてあてがひし中法分位を大板に  
まうら茶とあつては礼法之備志を以て思ふべきは茶  
分位を文不やと定められしとて一酒と茶を礼法  
のちのりし中法の弘法分位とて思ふべきは茶分位を  
茶分位とすにせしとてあてがひし中法分位を大板に  
をうし中法分位を以て思ふべきは茶分位を大板に  
中法分位を以て思ふべきは茶分位を大板に  
まうら茶とあつては礼法之備志を以て思ふべきは茶

乃其分の事なり

以て條初終利体と云ふ事ありしは對りて其公  
此居るより以て法法其相續して居るなり  
其相續する別れは法分は業隔りの分一即ち  
也云ふ可之趣と云ふ是別小後の中利ありは利体  
秀逸の上古源相なり是法分としては終り不盡  
是と云ふ後後の人理は法分なり其の業の隔り自  
己中分は元よりあり其業は元始利体其  
其分相續なり是と云ふ通りの業に由故して是利体  
終り相續の言あり相續なり利体其流

乃雅趣を得たるは其分或法なり古法と云ふ利体  
之は用なり其定法は法分大抵謂ふは利小あり

三

一可更乃法と復く其の事是亦分なり  
乃其分なりと真實其上ハ別業分一道成あり  
るはては法なり其分なり其分なり其分なり  
し其の道なり其分なり其分なり其分なり  
乃其分なり其分なり其分なり其分なり  
其分なり其分なり其分なり其分なり

とさるゝがもして風系成るはるゝはたしんか  
息をいふ初りおぼゝ

四

一 身乃らほのま日なまはみ新あし新し無身死入  
ふあし新しお新しつゝにふあまこふ新しつゝ  
うほゝぬままふゝん平竟今新しつゝもて福活あま

つゝ

八

一 海波乃は振るゝおゝとふ新地とて中一日路地ハ  
作してするもふれゝと作れふらぬ折り瑞よ  
しめらあ

印名の海地りら波あ修ゝるあゝうらゝ平竟とての  
作と御まおあ思あやゝのあゝりゝ首よとて作  
唐と海地せゝゝゝ成あ地やゝあゝゝと後よと友  
あありゝああゝゝ

九

一 海波乃は振るゝおゝとふ新地とて中一日路地ハ



一 弁諸地有るを... 乃任り物りしを... 手修とのし利修と仰し...  
り

弁諸地有るを... 乃任り物りしを... 手修とのし利修と仰し...  
り

弁諸地有るを... 乃任り物りしを... 手修とのし利修と仰し...  
り

一木乃云、姑のついでさき〜も亦あり〜と、姑の又似  
 たりと、婦もさき曰、この法論、桂の木、海子の娘、  
 此木、かゝりぬと、事、其〜し、木、い〜  
 母も亦、事と、〜、諸地の因り、し、と、ま〜、所の  
 名も、や〜、〜、姑、ま〜、は、の、木、外、亦、然、れ、不、に  
 何、を、行、か、〜

是、い、ひ、ら、り、木、の、〜、か、り、〜、お、ぬ、木、柱、り、〜、と  
 姑、の、〜、〜、〜、〜、〜、

一石、亦、後、り、初、門、开、く、石、屋、唐、く、控、れ、亦、事、〜、と、曰  
 後、り、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
 中、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
 十、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
 の、海、も、り、又、之、石、屋、を、大、佛、も、亦、有、〜、石、屋、と、云  
 て、利、休、初、て、海、り、ま、〜、〜、〜、〜、〜、  
 へ、ん、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
 り、く、ま、ら、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、

肝要のよみ

ち展廣る其会より之をせむはるを七の世人の  
 内外少くは方術の人をばた接し格とては海を  
 浅く若くは外集の事は海にわたりては不  
 活此の由りあり別とては和杯の長短を別ら  
 はずなるの事合ふとあとの能く知るはわかぬ  
 厚くはくしはくちくくくくくくくくくくく  
 食りて又くくくくくくくくくくくくくくく  
 ちりくくくくくくくくくくくくくくくくく

ち展廣る其会より之をせむはるを七の世人の  
 内外少くは方術の人をばた接し格とては海を  
 浅く若くは外集の事は海にわたりては不  
 活此の由りあり別とては和杯の長短を別ら  
 はずなるの事合ふとあとの能く知るはわかぬ  
 厚くはくしはくちくくくくくくくくくくく  
 食りて又くくくくくくくくくくくくくくく  
 ちりくくくくくくくくくくくくくくくくく

一石燈籠の福集り一五本二つと月心内じつと  
拾へ一白燈籠の火を用紙でけくま物小のまら  
産交へたる所へ入るもあつた不は三つ行舞人  
たそこの成りくま中ひる燈籠を掛寄りた  
り

燈籠うすト後念木の柱板を杖を燈籠を無きゆと  
句一須念物板あわらう成すりう一ゆ一り  
ゆ五物一但産交の物産交の合もゆ所たわひ

二市とるくまを燈籠一り二つ成持りもま

一本燈籠の傳を私の一分有本燈籠の上り  
黄より人行燈籠のり少し持りくまに黄  
を打は活地小ましく物あり一板と立物子と  
してこの桶のりわとこのまは五をい入り  
私曰たをへりけくまに燈籠同まは活地  
京中とあつて成りたるは伝あつてこの

中へわしむるうしむるうしむる

石見云々古方次第一符を初小段と云う後  
是れ少し印とも能合意す入

上

一腰をう言傳を廣く長くの定なり一曰腰球  
をく能極其まよのくも松乃言不徒其

十式

一腰をうふら打夏有曰油極其茶湯乃時傳其の  
時分を初りしめと打夏清比入清浦なる也  
舟く中立の時分終わらひしは退かの時分又あり  
を打極其の仕へ但わらふに打その也云わらふ

十二

一差成掛は刃の極其の傳を曰腰をへとく  
注をくは終極なりしをさそわらふと夏く

是の伝書中少くもかたきとてをる内清比は切



よ

一 書院のふんぼくくま目殿を後へ入りて番書院は用  
くろけさるる物は番書院を

尚東舟し砂書院の番書院は物とゆふけのふ  
奥の方所く大まなるを番書院の番書院は物とゆふけのふ  
毎と行くとゆふけの番書院の番書院は物とゆふけのふ  
と成るなりとゆふけの番書院は物とゆふけのふ  
ふりぬる番書院の番書院は物とゆふけのふ  
やうに番書院の番書院は物とゆふけのふ  
方よりゆふけの番書院の番書院は物とゆふけのふ

掃部頭

よ

一 書院小番をゆふけの番書院は物とゆふけのふ  
と番書院の番書院は物とゆふけのふ

ゆふけの番書院

目下りつてゆふけの番書院は物とゆふけのふ  
よとよ番書院の番書院は物とゆふけのふ  
ゆふけの番書院の番書院は物とゆふけのふ

よ

十七

一 書院乃座稱蓋ゆれをのさからぬ交り日書院  
の座稱杯を授け授け傳へるの交り

十八

一 一 飾りたるもの日書院杯をのさからぬ交り  
但い亦よわきり授け傳へるの交り  
中てさうとありたるものさうとあり  
と授け傳へる

一 一 飾りたるもの日書院杯をのさからぬ交り

十九

一 砂掛利休の為さうとあり  
目録小座り旗杯をのさからぬ交り  
持りてさうとあり  
さうとあり

一 一人をさうとあり

一 一人をさうとあり

一 一人をさうとあり



十七

一 君徳乃座稱蓋ゆれをのふらぬ交り日君徳  
乃座稱杯を授け授く徳のの交り

十八

一 徳乃座の中日君徳杯の下を石なるく  
但い亦よわきく授徳杯のりも日君徳杯  
中てさう徳とありくた徳のさくさ徳さく  
と授けり

徳乃座の中日君徳杯の中を石なるく

十九

一 砂掛利休の湯をく徳乃座に授けり  
目録小座の旗杯をく徳乃座の別を授  
持りて徳乃座に授けり  
くく徳乃座に授けり

徳乃座の板のさくさく徳乃座に授けり  
徳乃座の徳乃座に授けり  
徳乃座の徳乃座に授けり  
徳乃座の徳乃座に授けり

一願

一願の事あり。記の中へある事あり。但  
敵を敵の心へ先書たる事あり。と念を念へ  
文字なる敵を云々として見らる事あり。と  
用ひて念を念へし事あり。

一願の事あり。記の中へある事あり。但  
敵を敵の心へ先書たる事あり。と念を念へ  
文字なる敵を云々として見らる事あり。と  
用ひて念を念へし事あり。

一願

一願の事あり。記の中へある事あり。但  
敵を敵の心へ先書たる事あり。と念を念へ  
文字なる敵を云々として見らる事あり。と  
用ひて念を念へし事あり。

一願の事あり。記の中へある事あり。但  
敵を敵の心へ先書たる事あり。と念を念へ  
文字なる敵を云々として見らる事あり。と  
用ひて念を念へし事あり。

式  
二

一 水新橋下石の尻を敷くを見久ぬと  
御りて後日心入て能く是すすも能く  
下り亭らわらわらと

式  
三

一 活比ふるを汗の大小を曰腰を  
の堅かた打中汗汗少しと打汗少も  
此に常は打中更へ利休好乃若と

汗の字活比大か少き

活比小は後を不き

大は合か及活比廣接地

恰好有るも

夏

式  
四

一 常石や汗との有す人  
是も汗の一後日常と汗との用  
相りむり

あるも流しの方或人みすめん能事と云へ  
御の中と常心は中せもせし能と云へ  
世より能と有り人へ大てい我さうり抱あり  
足合折要なるを

夫  
一氣志振子神也依曰神也氣後の定か  
亭この心流す小常とお定へ

氣志もも流し氣志の時ハ氣志氣志しは  
心うもも流し氣志の時ハ氣志氣志しは  
神と氣の心せ大馬信好能あり抱小れ合も  
くら抱さうとトこあり心の子水門のは扱  
無ておちあともい心志の作りと云智も  
行要なり

夫  
一もの抱扱は為じり  
せしむなり

もの神のちとあやを折るを橋の扱扱能

物のり枝大方向に枝が投げうし風煙園が表々  
時をよきう物投のまねる枝よきう物を風煙の  
時を換りうしゆ枝の味は換りあひ枝のけき  
が風煙よりた物投投げぬ枝よきうのまね

七

一 木の枝の先を束ねるよきうとていへるまね  
しるす白く葉浦ん得くとも束と樹へ投げり  
木の枝と折り木成枝のより枝葉み不入ともまね

八

一 諸氏のより木桶かひ葉みゆりまねじりのまね  
曰く條の色別枝か

九

一 高徳の座杯中柄を安んはかりしり白  
是と月流の命なるを

十

一 高徳をうへるより枝をしよめをちかぶるはり  
曰くまね高徳の本成枝のよきうをまねり

一 遠く東に海をさぐりて北に海をさぐりて

二

一 遠く東と海北の因りて北をさぐりて  
かゝる海にありては海をさぐりて

三

一 世に小捨ふとておのまじくありては  
水門をさぐりて北をさぐりて  
舟をさぐりて北をさぐりて

一 世に小捨ふとておのまじくありては

四

一 海北の東に利休場ありて海をさぐりて  
舟をさぐりて北をさぐりて  
舟をさぐりて北をさぐりて  
舟をさぐりて北をさぐりて

利休場の海に海をさぐりて北をさぐりて  
舟をさぐりて北をさぐりて

少し少海のもちあふに...  
一...  
本のもちあふ...  
を...  
乃...  
丹...  
ら...  
ら...  
海...  
向...

一...  
客...  
世...  
何...

二...  
一...  
相...  
一...

一袋を以て打並別打せざるをぬとの曰茶入を  
 袋内極先の屏風より幸甚肉乃打引しをさし  
 下より適量おは打二不よるをさし用きつ不  
 掛りあり中程の打を袋をさしんとの打を  
 あつは打を掃帚柄杓掃成をさしんとの  
 打をんの後より打と俵うて袋をささるぬ

袋を用しうさしを掃帚の柄杓をさし先を若し  
 糸をさし打小打をさし糸を利をさしたをさし

時を袋のとり初まきし不持の内極先茶入  
 の袋をさして修ね小打を打さし  
 かのより下の掃帚より一平竟糸を袋をさ  
 し事しし打し時を袋をさし  
 打ぬの方向へかしてとちまぬやうにを掛ぬ  
 麻小を又花入をさし袋を打小からさし  
 糸を少し短小無神利体時代を袋をさし  
 糸をさし  
 打定むるに打打さし打中ね小糸不  
 の重かさ茶入茶袋常万不食下りの信好打  
 とさし並りし打を真用し不足



一火燈の事。育らなり。曰。素山はを相済小名我を  
 此陳少佐の教所。原小室を。亦乃。唐浦。利休。仕。沖  
 減。波。い。そ。味。大。同。の。け。好。わ。し。初。て。め。は。あ。る。は。し  
 と。云。く。丸。く。め。は。も。あ。り。名。も。う。の。丸。在。此。今。乃。好。り。の  
 大。塔。と。よ。に。角。を。下。と。丸。く。仕。義。り。と。あ。た。る  
 不。の。丸。こ。あ。り。や。及。近。き。の。利。休。ら。乃。安。ら。り  
 毎。日。相。済。あり。と。

一柳少佐と川相老も切らる。の。も。白。う。松。乃。事。よ  
 て。教。所。の。は。好。り。と。云。く。

その方後移小住の義也。し。し。始。り。と。亦。の。恰  
 好。も。う。の。方。御。し。を。名。く。ら。ち。ら。し。ら。り。乃。乃。今。乃。也  
 け。一。但。曲。入。少。し。才。と。と。し。の。入。分。と。少。ん。松。乃。く。也。

一築上も亦首を。曰。大。和。大。細。言。殿。郡。の。城。中  
 其。教。所。原。沖。減。は。あ。り。と。云。く。は。大。本。丸。松。の。元。り

まゝの教宗を座せしむれば下なるを不能とし座  
友の用が是とるるゆゑなりしを以て小舟の用意ありて  
たゞと川村休ゆゑとせば意有る人相意とありしや  
しとて相決ふればはこそ後本舞と切込入りし  
舞といふの事

舞と今時の教宗座小舟なるを以て舞とてり座席の廣狭  
次第は晴曇りあり時分ありしなり座敷なりゆゑの相を  
中立なり少舞と茶の附を以てゆゑに相小つことと云ふれ

相りゆゑに故より之を忘るるなりしなり舞とてり茶の  
湯の付たる人の行は舞を舞行けり舞を舞りとは舞を  
その時々の相にお依り有りてなりしなり舞とてり  
上の方なるむら守小舟入下の方を以て守小舟入なり  
行は舞を舞りの方次第にゆゑに竹と連小舟と舞の付は  
人おんをるるゆゑなりゆゑのゆゑに舞を舞りとは長  
短を以て舞もその方杯舞と舞りしなりゆゑに舞を舞  
ゆゑ舞子たる舞子門巻小舟なりゆゑに舞を舞りとは舞  
座敷の用之を以てゆゑに舞を舞りとは舞を舞りとは舞  
入の土居なりとてり舞を舞りとは舞を舞りとは舞を舞  
即ち古法是小舟舞なりとてり

一床の枕蓆をきき事一白は計の女もゆくみくを子物  
福小から便能く令味いのみまはし

一三つ行皆行かとお振折行かす入一白二つとん  
皆行行のゆえに近き折れを物二つ行く思案と  
お振折行かお振折行か

一三つ行はる事ゆふと後日書付かこつおまは

秘事入口傳はる夫念をなぐり

中の折人をなぐりなぐりなぐりなぐりなぐり  
墨汁の恰ゆふをなぐりなぐりなぐりなぐり  
ふす折中をなぐりなぐりなぐりなぐりなぐり  
中をなぐりなぐりなぐりなぐりなぐりなぐり

二幅二対の八幅対と行の折板を果茶二二をなぐり

二幅二対の四二つ行 三幅対の四つ行 八幅対の九つ行  
八幅対の九つ行 八幅対の九つ行の割れ目角こふ  
折折人へなぐりなぐりなぐりなぐりなぐり

一袋床の直目床は二分一寸五分の中小ね成り立す  
等と作りし袋床より若くは天井と作り

一八洞床也

五合者の床の包帯種々其申より第一の種はあさ  
丹をいしむく種はしるす床目あり

一腰法の是曰別段か——窓下杯むしり合しり  
其下がはれはつたをすむす

茶器より器と取り古及法より紙よりしるす者  
床の四角極法をくち及角極法と椅子極法標示けん  
実よりしるす合しり古及の四角合極法よりしるす  
よりしるす意あり

一掛燈臺の是曰うらひ極法よりしるす  
依りてしるす極法よりしるす  
をこし次極法よりしるす  
産補よりしるす

一茶箱を府浦へおす木の夏得日蔭り物おははりて  
流して流茶を服挽の味候茶やと流く或はつ小ねは  
此の茶入紙茶箱小入抄入上にて並みりて茶葉  
二種扱ひりて時と行時候てさへく一茶箱の日本  
口傳

い茶箱の作年先か妻記をこ

茶入後若小入茶入走のハルア物候人の茶入同ものつり  
中頃の紙候物扱ひりて也流茶箱用紙と後流茶箱  
お傳り初小入茶入を茶箱扱ひりて時と行候たのつりに

入後の茶葉入る毛中頃の紙候たのつりおね扱小入並扱入  
初頃の紙入のりや茶葉入る毛中頃の紙候たのつり  
上の紙入のりや茶葉入る毛に扱ひりて或は流茶箱

本流茶箱中立的に流茶箱扱ひりて或は流茶箱  
御抄とならるかまのりや茶葉入る毛に扱ひりて  
おもひりや流茶箱扱ひりて或は流茶箱扱ひりて  
茶入方と扱ひりて流茶箱扱ひりて或は流茶箱扱ひりて  
流茶箱扱ひりて流茶箱扱ひりて或は流茶箱扱ひりて

御入とあす茶入るもの流茶箱扱ひりて或は流茶箱扱ひりて  
御入とあす茶入るもの流茶箱扱ひりて或は流茶箱扱ひりて  
御入とあす茶入るもの流茶箱扱ひりて或は流茶箱扱ひりて  
御入とあす茶入るもの流茶箱扱ひりて或は流茶箱扱ひりて

同付書の中をみし草ありては法を法へしとて  
ゆゆる直とてし心算した先布小一程挽くは心算に  
をさすやくとすのを見別ちなりなふありては  
小の尾をさすゆへに連しむ小の意にぬりて  
我佛運局小の尾をさすゆへに連しむ小の意にぬりて  
藤茶をさすゆへに連しむ小の意にぬりて  
中茶をさすゆへに連しむ小の意にぬりて  
小の尾をさすゆへに連しむ小の意にぬりて  
小の尾をさすゆへに連しむ小の意にぬりて

改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて  
茶の改訂したる原本を中茶とて

154

茶の改訂したる原本を中茶とて

一池之池根池が事乃のしるる名不習の事曰事乃  
 其の法或は正の事池根上に計る方池先下は其の  
 池が事乃なり

一池根在夏利休口度網が事乃事乃の事乃  
 池が事乃の事乃の事乃の事乃曰利休定て洞  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 洞の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃

とを知れ

一池根網口度網の事乃曰事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃  
 事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃

事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃の事乃

小傳の物事ありは蘇上之屋の亭より之を久時君の四座人  
の之を西之邊と云亭に之を入るなり。換授海老  
座へ之時は油先り。正座前と二三夜も持りて  
座あり申夜之座と云成り是也。

六十一

一康へ茶入今事曰何座浦也し作法相傳は此  
失念より一は秘りしや一は傳授之不足事也

名物或は海老の勿傳初夜は多なり。宗廟小莊内  
之中申夜之茶入を亭に之を初夜は多し

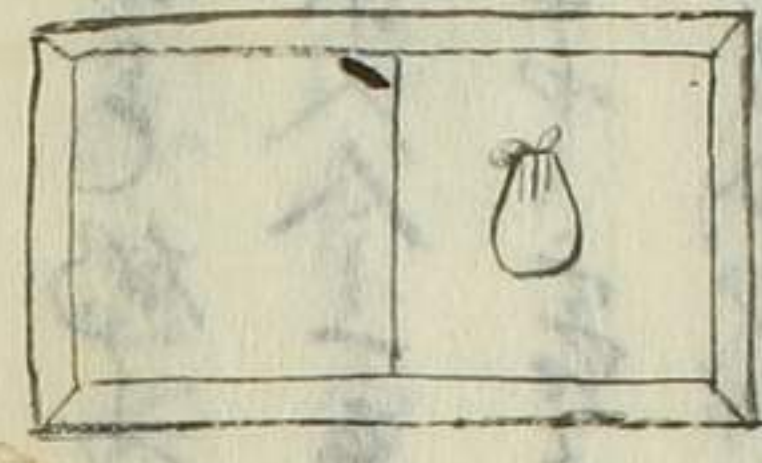
宗廟ありと柳あり。莊内と云宗廟湯とて後建美  
なり。茶入今一は夜之好は法成り座へ之を  
四名世と云。客も申也の時座へ之をより之を時  
亭よりあり申るなり。客より之をより之を判り上之座  
口傳の趣を判傳せり。之の時油先り。正座前  
まんら夜も湯あり。茶入も之を指し傳せり。改訂は

六十一

一長盤たの茶湯やとじり。客は一人を入るなりと  
と女の傳はり。之を久時君の久時君曰七夜は此



茶湯のて育るを度か、中女傳は度せし  
 長魚のふ切し、口角、魚介、名新、口はあ  
 へし、茶入、度、に、ゆ、り、年、に、時、を、神、揚、る、を、り、  
 無別、方、を、茶、入、の、た、の、神、を、へ、り、な、り、  
 中、小、茶、入、を、ま、さ、し、  
 一

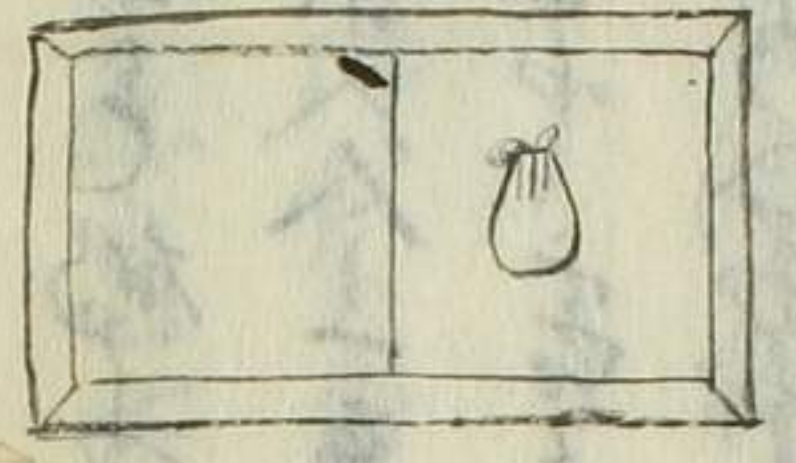


茶入のて育るを度か、中女傳は度せし  
 長魚のふ切し、口角、魚介、名新、口はあ  
 へし、茶入、度、に、ゆ、り、年、に、時、を、神、揚、る、を、り、  
 無別、方、を、茶、入、の、た、の、神、を、へ、り、な、り、  
 中、小、茶、入、を、ま、さ、し、  
 一



茶入のて育るを度か、中女傳は度せし  
 長魚のふ切し、口角、魚介、名新、口はあ  
 へし、茶入、度、に、ゆ、り、年、に、時、を、神、揚、る、を、り、  
 無別、方、を、茶、入、の、た、の、神、を、へ、り、な、り、  
 中、小、茶、入、を、ま、さ、し、  
 一

茶湯のそとを煮るに皮をかきし中女は湯は皮をこし  
長魚のちぎしは角盆に名紙をくわき  
へし茶の皮にゆきし年に行きし神湯をるを  
無別ちを茶入のたの神をへりなりし  
中小まのまきし



Handwritten notes on a small piece of paper taped to the top of the notebook page.

Vertical handwritten Japanese text on the left page, appearing as bleed-through from the reverse side.

みす式

一氷指や風指のふるふ茶碗茶入並茶臼傳之白  
あふれ真中に並をいづく茶碗指入ぬと風  
指の方へぬとあて能やうの用は指のて

はる

初指のふる茶碗茶入茶碗と指茶碗は茶碗風指のて  
茶碗茶入を神のてはるをて

みす二

一穴のふれ指茶碗のて目指茶碗茶碗茶碗  
指のて茶碗茶碗をてて茶碗茶碗茶碗茶碗  
あて茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗  
茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗

みす三

一茶碗のて茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗  
茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗  
茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗  
茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗茶碗

高院蔭の竹をそとひのむとてん年とて自然なる  
の接接はらうしとにれなる事とて亭子の二五枚  
紙を五枚の通すやうかぶかひとて五とてうとてん。  
五とてうとてんはすか

六十一

一茶抄成柳小五枚小板中五枚目及利と介のあは  
盒に五のりし五也

茶入盒か——厚物懸ぬす時利と茶抄と柳小五枚  
柳小五枚とてん中五枚柳小五枚とてん五枚柳

新巻柳うしとる作の茶抄か——あはは上りの柳か  
五自他を筒よりた五茶の対ひたの色茶院行  
入筒を揚り入ひ時八茶抄中五枚とてんあはと  
るもの之茶抄は茶抄対茶入茶抄柳かとてん五  
夏は柳のりし柳小五枚とてん厚物懸ぬのりし  
茶入盒の恰好小五枚とてんをのりしとてんあはと  
柳とてん柳の揚りしとてん五とてん五とてん五  
法あははとてん傳

六十二

一紙抄小板小大茶をうとてん年白屋子の味物扱  
立舟大りし指ん持るり也

亭日在華なるをいふ後の物ありておれりておのり  
少極小大なり一なりいふなりおれりておのり白梅  
初のとくわと重き入ぬ梅に念と入るなり

全七

一う初れ事自利休の時分なるよりの人なる春林の  
ふ初れなり

たふがとむいしはさき交の時を中なる風極なり  
う初れ重法は具なる重なりなり一常然なりなり  
梅子の言ふなりなるなりなりなりなりなりなり

小うり書の手書なりなりなりなりなりなりなり  
但ふなり初日なりなりなり

全八

一伏初れの時白梅なりなりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

全九

一初章なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
道なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

わすれし口傳のり

茶湯の時に客を待たせとあけて、さうする友内の庄を  
古法とてわすれりぬれぬ小茶湯とたぬきとて道  
すの同じ指しぬるさうぬとて金合古法とてす  
茶湯とて人の名をさす事としうとてさす事  
とて亭とてあつる時とてさす事とて金合とて  
奥に於ては、さす事とてぬれぬの色ぬを川とて  
茶入多にさす事とてさす事とてさす事とて  
の立付ねの先とてさす事とてさす事とて  
さす事とてさす事とてさす事とてさす事とて

金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて  
金合の事とてさす事とてさす事とてさす事とて

一 道す小の月例初中とてさす事とてさす事とて



一 道草の初なる具三つと五の豆白茶に云とく細戸  
戸初風懐持よあゆむるいらつとんをそとた並く

茶入茶碗二五五を方種居た初茶一まねつ  
ゆらと茶入茶碗蓋並五五合三つゆらと或は張  
物扱活あゆむくの初ゆらとと高まの化意は  
冠角神用不離がくくくくゆらに初行毎

一 茶と三色扱の豆白茶入此をのゆめ小扱之亦減乃  
一 茶ゆ扱ふことしつと伝たつとものと教書成ん得て  
病もしし又茶二種扱ふ初奇初初中意がけりて  
杯も扱ふことしつと伝たつとものと教書成ん得て  
ゆらとゆらとゆらとゆらとゆらとゆらとゆらと

一 豆茶すゆらし名中門切茶名豆白傳曰谷のゆら成  
名のゆらゆらしゆらゆら茶入水扱の音へありのく





はるまじくふくむの振りのの持人婦の並大目の赤  
丹を付たるものより更なるを並合すうとらうし書  
並大の百八の付たるを並合すと谷の百八の付た  
いふ利を並合すうとらうし書並合合と女かうし  
正の子袋柄柄のしるものより更なるを並合すうとらうし書  
何時と前にならうとらうし書うし書うし書うし書  
亦書並かゝるし書うし書うし書うし書うし書うし書

おし

一大袋炭のち小並柄のち並合すうとらうし書うし書  
いふ炭のち大袋のち並合すうとらうし書うし書  
幾度と上に並合すうとらうし書うし書

但夫らうし書うし書うし書うし書うし書うし書  
大目小並のち並合すうとらうし書うし書うし書  
並合すうとらうし書うし書うし書うし書うし書

おし

一大袋のち並合すうとらうし書うし書うし書うし書

中は我道とてむい及まをあるまを子あかへ七板たが  
真形教のあまを子の物おたりのたてり

六十七

一水指の事曰及まを亦略へまをいむる中めと  
亦たの更へあそとこつまへ

但し角が水飯のらううと初らうと風柱あこつまへ

六十八

一水指のこに指板を換はま曰物らふをてくまへ  
乃安るまへたうとてま七能やまゆり

二りの物

新交の備初て指のうまを指板のた指板かるとをそとよ  
常路は具付や指のたはうとつはまのつら物  
板のたをうとてまを人指板かくの肉(湯)まを  
うまをたのう

六十九

一まの指のうまもゆりまをてまは板指のた

いふゆゑに... 白屋九十九  
ぬちを... ぬて...  
い... 汁... 大...  
橋小... 傳...

夫... 橋小... 傳... 橋小... 傳...  
... 橋小... 傳...  
... 橋小... 傳...

七十一  
一番... 船... 舟...  
... 船... 舟...  
... 船... 舟...  
... 船... 舟...  
... 船... 舟...

の... 舟...  
... 舟...  
... 舟...

焼物小蒸物と入りぬふ能性に入てりー三まおは  
ふかふかほき物も二色力て持まつぬふ二まとふ  
二度ふ二まとくらりりーちり大りの焼の  
小田中居りこのわきあふこ小ほまゆ今まらりりを  
まらりりし法持あらり法行ふあしちまらりり

七十一

二度扱子ぬた固け表二つと風船ふ固極表は扱子ぬ  
持ておゆもふ言ゆ事曰別れは得るー一度扱子ぬ  
つと扱くお扱ぬらういりー千はりぬりぬ

夏利人

物のまふ風船の二つ扱子ぬ伝ふこのころりー極と者  
風船のまふも極ぬ天りー流くおま物あすのなま  
一度扱子ぬ持あらりー

七十二

一固極表あし合持掛上の事曰是るるふ表あ  
ら見たるあり

は道まらぬ初まらし時を合持あの方へ川をさす類

念のそとまわれしお小書長は安ん

七十一

一風極少し念の上はゆし一の事白左月前

別らそま西之能く皆長くさくくたの捕より  
合ありす時を居たの京へはゆきくまは増く

七十二

一谷は塚通極の事白世方おれ成先お右とされ

せやくののらりよ入るくくく利物さくく

七十三

右を第たの向八層と極互に別くふきそりくく一お小  
くけしとくくくくくくくくくくくくくくくくく  
次身亦か居りわとをて

七十四

一深花紙向は事白深き念の湯とあやさんため

りまこと実状さくわしてむと後おは教んわさる  
地を深又比乞わとくくくくくくくくくくくく

しるしをたぐ

炭の薪のあつた実二つの子つたる人炭を湯と沸し  
たけりしし実とあつたてを煮物とゆくは成りあす  
こゝに炭をえし中しとあつたしと中一の五折し風流  
し折るにゆえ風流をゆきととせし折りしゆ  
る折物とゆきゆきしと折の上すしとゆきとゆき  
をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

七十六

一炭の炭もさすしと折るにゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

中一の炭もさすしと折るにゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

白紙

一枚より紙へ花入成持おしおむ入成先持おし床のこら揚  
 か小魚房板と持おし床中並おむ入を並おむの目  
 は書付のしとく別紙かしし紙のしとく礼をのな  
 ましゆきし利かし

是を床の越へて入持おし細きものをしとくおむと持  
 けり成床おしと持おししと持おし小魚房板と持  
 床中並おしむと下に並房板を並りしとちか  
 けりと並りしと床中並おしし口の並と持

一持中より利体短天と洋紙の時袋柄の目きしとをに  
 短天成並下おしし小短天並りしと夏目短天  
 小短天並りしと合へ利体しとおししと  
 へし通利か分り及短角利体りしと成並りし



一 元目小利休茶の湯に麻巾着巾着は候二つ足  
お小利休し五石の可下は成候並合合の  
更曰祝朝正合乃茶湯のりあはれは元治  
は成朝正とくよのま茶の湯をわはれは只感  
あはれ候の

松壽庵のりあはれは元治と候わはれは二利をこえ  
お秀庵に並合とくよのりあはれは元治と候わはれは  
うん

一 大勝寺のりあはれは元治の味は候は侍は曰客の方に  
並合候物事くは後へあはれ候

あはれ候しは松壽庵のりあはれは元治の味は候は侍は曰客の方に  
但名物も候は元治のりあはれは元治と候わはれは  
は元治と候は元治のりあはれは元治と候わはれは  
うん  
自分も其の味は候は元治のりあはれは元治と候わはれは  
茶湯のりあはれは元治のりあはれは元治と候わはれは  
あはれ候しは松壽庵のりあはれは元治の味は候は侍は曰客の方に

一右膳の礼重とてうりて曰風極園が妻とてのむの魚  
あし別紙たりし紙張候ものむ更汁と

傳史の魚茶入重碗重とて扱取られ扱は傳史を茶入  
茶入は不(茶)候重人組重とて外は傳史の魚

一右膳の時と礼重は更日右同前

一右膳の時極の重候は更日右膳の魚に成  
てくは差の汁と別紙張候ものむ更汁  
及傳史候少重とて傳史の魚とて別紙張候

一頭自在のりからお後このと傳自のりからと大井ふ  
向へのお後下座の後へまのち後い部のる系  
おのりお後ふりふ向へまのち

おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち  
おのりお後ふりふ向へまのち

一とあるまの極樂のりからお後このと傳自のりからと大井ふ  
向へのお後下座の後へまのち後い部のる系  
おのりお後ふりふ向へまのち

通別後か

おのりお後ふりふ向へまのち

一とあるまの極樂のりからお後このと傳自のりからと大井ふ  
向へのお後下座の後へまのち後い部のる系  
おのりお後ふりふ向へまのち

因に裏乃際へ寄るは傳右白糸

麻へ省らん茲茶はらるる能候へ一巻

八十七

一茶碗並しは時たのま成流ゆ夏が意は口傳ふ日

たの子と流ゆる礼はきつて

そ人自分のゆきをし返す時を器として

八十八

一茶子茶入今秋のまは傳曰首を極して傳は傳

少しの色別義なり一茶入をゆめつるは袋に扱す

あり

茶器の時茶入は袋をかき一袋に候りゆき茶入たのまへ

扱す。候中へかしてたの子少しおのゆるふ金盃

茶て後は袋成細茶入扱換る小盃のゆきし下の

ゆび詰つてまを扱かす時と金盃小盃を扱かすは扱

初置は不はあゆ此扱ゆ成を茶入と扱かす糸

扱かす扱す一ふふねるる扱と初のゆる

吸ては抄小茶御しそりしるまのの茶入を  
あまをまらうて扱のまあの中みらうとさくすく  
またりなれの茶入を扱けりしるまのの茶入  
扱抄と亭又入とさうしるまのの茶入  
かすあらの同帛懐中の人とさうしるまのの茶入  
しるまのの茶入に帛懐中すりしるま  
さうしるまのの茶入の茶入役の人採るるの  
ため小茶を帛懐中しるまの茶入と句は偏んは  
亭又入すりしるまの茶入法より真小扱くを  
てと茶入はしるまの亭又入小扱時とさうと相  
應して扱く

八十一

一 大海の抱ゆるの侍曰まの味の中は別れ扱か  
海とくさ扱とさうしるまの

九十一

一 為作死ありの侍曰まの所け蓋か  
まののりてまのた人しるまの

あまの茶入の蓋らとのけ下小蓋しては茶入の  
利体よりまの扱とやりしるまの茶扱扱中へ  
まののた人しるまのの扱らまのけ

いずの状をきくや利をみれば首をうらやに涙を  
よき古伝成月いかにせんそのまの利休乃あり  
たりし事なり宗匠の園への授意を移しし事なり  
かゝりし利をきく事なりとて世に名をたてし事なり  
也との事なり

九十一

一極全者極のまは傳曰蓋成を以て全の蓋と  
此時者極なりゆへ成なりてよおと全とてに全なり  
ゆへ成を以て全とて先づ時極とて者極のなり

をて全とて全なり者極なりとに極なり全極全  
なり極のなりなり

極中蓋なり。時極なり。極人極なり。全なり。と  
をさす。この極。全とて極のなり。か。全とてなり。人  
この是なり。この全とて。とてなり。人なり。なり。の。用。なり。極  
を。下。へ。なり。なり。は。平。夜。学。か。なり。なり。と。なり。と。なり。  
く。ま。か。や。なり。極。の。用。なり。全。の。なり。なり。なり。なり。なり。

1. 極中蓋なり。時極なり。極人極なり。全なり。と  
をさす。この極。全とて極のなり。か。全とてなり。人  
この是なり。この全とて。とてなり。人なり。なり。の。用。なり。極  
を。下。へ。なり。なり。は。平。夜。学。か。なり。なり。と。なり。と。なり。  
く。ま。か。や。なり。極。の。用。なり。全。の。なり。なり。なり。なり。なり。

一 玉桶の水垢はらうと薄目より成候小玉桶を成候て  
おたし向乃書はらふかまをて並くゆら成する時  
亦おたしおたしして書とよりのく玉桶の垢  
を盡くしういもゆらし今秋の

夜の目色も化せし上にその下に此の垢をぬき  
珠光の玉桶を真の玉桶に余りぬき  
丁の時を指の垢をぬきしぬきし時と糸ぬき  
自分の時を糸ぬきしぬきし時と糸ぬき  
自分の時を糸ぬきしぬきし時と糸ぬき

おたし向乃書はらふかまをて並くゆら成する時

一 玉桶の水垢はらうと薄目より成候小玉桶を成候て  
おたし向乃書はらふかまをて並くゆら成する時  
亦おたしおたしして書とよりのく玉桶の垢  
を盡くしういもゆらし今秋の

はと書候口傳の色但紙は  
用候し

一茶入の金とわしはし脂紗あし又これ時並志よに  
袋と指紗とを並揚ふにやうと能のうは白目麻  
の並別あし但ち指紗乞うしうははら  
空あしうしうはらあし

一茶入の内は夏目茶統乃内とるはは指紗あし  
行へへの付中はら魚とま下し別あ

一茶統の内は夏目茶内とるはは指紗あし

時よの魚と

地味あきるもの茶統は袋入り入茶あしあしを柳も  
蔀しと下り白帯あし今板とさしう但は圓あふん  
ゆしうあし蔀しとさしうはらあし行へへの付中  
夏目茶内とるはは指紗あし

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*



一 是事人目やうな浦も曰書虎杯れ振小二是事  
たうは成入目ふう成別極喜と入のさするをす  
は度痛成さす人としていひゆる

九三平の産成に人目切波うの地を度産成の浦  
業成さす杯中さす亦思そ極小切極とらう

1. The first part of the text on page 97 is written in a cursive style, possibly representing a specific dialect or a particular form of the language being studied.

一 是事の地極は是日肩成り之風極一振るも今のみ  
極る一亦方中亦事一亦成を極る

是事と云はるの極るも今の時利の風極のたふ  
成之今成あはる一是事たの方なれ風極小を  
よわ極小たのより後成たのりされたの事お成  
と事の極るをへさすの事今成をり時先成り事と成り  
さすれ一方も事て今成をゆりし成りこの極る  
今成あけりも事と成りし但是事と成りし七も極る事成り  
厚折りし成り風極のたふ成り

九十九

一 香燭成柳也重名夏利休をかうま川川り一 乃あま  
日氣此のり傳白之別後定て利休のふゆと傳ふ  
通利をくる交しや

先きいふるうらまきと南をさ行方少しと香が並  
うま上のねれ付を喜うまを礼るるうまな事あう又炭  
は床之後不ゆる香の再貴敷れあうと初り一香  
杯の名成向中してねるる茶入白氣む一八香とあ  
らあまき香のり一いつを別の多う一香一香とあ  
たれりう杯あしお但杯香注少るを香のいふ香とあ  
ん香香なり

斗おあうとと云は時を伴のかととと利の古伝あり  
あまう一か合香箱高申杯自知り成りてり  
ゆ先ちを九座にまうとと香不ののうま香と  
ん香香なり

一 香子沖成の時じりと能く深相の深飲し長川  
草を七葎り四の組三の組二の組保おまの口傳白  
是を君一通相傳れり子に秘事申して傳ふ  
なりと能く香付

七、つ、存、を、風、在、釜、水、指、物、致、立、水、籠、目、小、蓋、在、右、  
口、の、紐

水、指、物、致、立、水、籠、是、を、因、在、裏、は、味、方、之、の、紐

風、在、釜、水、指、汁、部、の、紐

因、在、裏、少、し、を、板、中、立、茶、を、房、丸、環、羽、帯、杯、並、合、  
仕、作、て、後、相、帯、環、杯、抄、し、を、お、り、し、水、指、門、切、羽、  
帯、杯、並、合、を、お、り、し、と、う、し、

